

氏 名	京 俊輔
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	保健福祉学
学位授与番号	博甲第132号
学位授与の日付	令和2年3月24日
学位論文の題目	障害福祉サービス事業所における障害のある被疑者・被告人の 受入に関する研究
学位審査委員会	主査 村社 卓 副査 近藤 理恵 副査 中村 光 副査 荻野 哲也 副査 山下 広美

学位論文内容の要旨

本学位論文の目的は、刑事司法手続き上にいる、触法行為をした障害者に対する福祉的支援の一つである「入口支援」に着目し、かれらの受入先になっている、障害福祉サービス事業所における、障害のある被疑者・被告人の受入の構造とプロセスについて、定性的（質的）データを用いて、実証的に明らかにすることである。

研究枠組みは、「入口支援」の展開に過程に基づき、障害のある被疑者・被告人の起訴中の時期を「受入検討期」、判決直後から福祉サービス利用開始の時期を「受入準備期」、そして、福祉サービス利用開始後を「受入開始期」に分けたうえで、研究の視点を「職員による支援内容」および受入に対する「職員の不安と不安軽減要因」として設定した。

「受入準備期」における支援内容は、A 県内の障害福祉サービス事業所の職員6人に対し、インタビュー調査を実施した。逐語記録の文字数は41,573文字である。分析方法は定性的コーディングを用いた。分析の結果、支援内容は、《体験利用を通しての利用意思と適応能力の確認》《事例の確認とサービスの調整》として明らかにできた。

「受入開始期」における支援内容は、3県の障害福祉サービス事業所の職員9人に対し、インタビュー調査を実施した。逐語記録の文字数は98,587文字である。分析方法は定性的コーディングを用いた。分析の結果、支援内容は「再犯をしないための働きかけ」と「生活の安定化に向けた働きかけ」に分かれ、前者は《ルールの伝達と約束に基づく促しと確認》として、後者は《生活の基盤作りに基づく評価の実施および確認とストレスの発見》として明らかにできた。

受入に対する職員の不安と不安軽減要因は、4県の障害福祉サービス事業所の職員14人に対し、インタビュー調査を実施した。逐語記録の文字数は186,698文字である。分析方法は定性的コーディングを用いた。分析の結果、障害のある被疑者・被告人を受入れた事業所の職員が、受入の際に感じた不安は、職員自身の不安を表した《自身の

経験不足および能力に対する不安」と、障害のある被疑者・被告人に対する職員の不安を表した《障害のある被疑者・被告人の社会関係に対する不安》として明らかにできた。また、不安軽減要因は、《情報収集や評価による相手の理解》と《身元保証の確認および連携とバックアップ体制の確立》として明らかにできた。

本学位論文の研究の結果、障害福祉サービス事業所における障害のある被疑者・被告人の受入は、以下のように説明できる。

障害福祉サービス事業所の職員は、その支援内容として、「受入準備期」では、本人に対する支援内容である《体験利用を通しての利用意思と適応能力の確認》と環境に対する支援内容である《事例の確認とサービスの調整》に取り組んでいた。また、「受入開始期」では、「再犯をしないための働きかけ」である《ルール の伝達と約束に基づく促しと確認》と、「生活の安定化に向けた働きかけ」である《生活の基盤作りに基づく評価の実施および確認とストレングスの発見》に取り組んでおり、両者は影響し合っていた。

受入に対する職員の不安とは、職員自身の《自身の経験不足および能力に対する不安》と、障害のある被疑者・被告人に対する《障害のある被疑者・被告人の社会関係に対する不安》であった。そして、前者の不安軽減要因は《情報収集や評価による相手の理解》であり、後者の不安軽減要因は《身元保証の確認および連携とバックアップの確立》であった。《情報収集や評価による相手の理解》《身元保証の確認および連携とバックアップの確立》は相互に影響しながら、《自身の経験不足および能力に対する不安》と、《障害のある被疑者・被告人の社会関係に対する不安》を軽減していた。

加えて、「職員による支援内容」と「職員の不安と不安軽減要因」の関係については、「受入準備期」の《体験利用を通しての利用意思と適応能力の確認》と《事例の確認とサービスの調整》は、同時に取り組まれながら、《情報収集や評価による相手の理解》と《身元保証の確認および連携とバックアップの確立》を導いていた。「受入開始期」の支援内容である《ルール の伝達と約束に基づく促しと確認》と《生活の基盤作りに基づく評価の実施および確認とストレングスの発見》と、《情報収集や評価による相手の理解》《身元保証の確認および連携とバックアップの確立》は、相互に影響し合っていた。

本学位論文での成果は、従来、司法福祉の領域において、「入口支援」に関する研究では明らかにされてこなかった、「入口支援」を通じた障害福祉サービス事業所における障害のある被疑者・被告人の受入に関する支援の内容、受入に対する職員の不安と不安軽減要因、および両者の関係が、「受入検討期」を除いて、限定的ではあるものの、定性的データに基づいて実証的に明らかにされたことである。

主業績

No.1	
論文題目	元被疑者・被告人のサービス利用開始後における障害福祉サービス事業所による支援内容の検討
著者名	京 俊輔 村社 卓
発表誌名	司法福祉学研究, 18, 60-78, 2018

副業績

No.1	
論文題目	障害福祉サービス事業所における被疑者・被告人の受入準備の定性的データ分析
著者名	京 俊輔 村社 卓
発表誌名	島根大学社会福祉学論集, 6, 17-32, 2017
No.2	
論文題目	障害のある被疑者・被告人の受入に対する障害福祉サービス事業所職員の不安と不安軽減要因
著者名	京 俊輔 村社 卓
発表誌名	社会福祉学, 61(1), 1-16, 2020

関連業績

No.1	
論文題目	控訴審における罪に問われた障害者に対する「入口支援」の可能性-島根県で取り組んだB氏事例を通じて
著者名	京 俊輔
発表誌名	島根大学社会福祉学論集, 5, 1-19, 2015
No.2	
論文題目	島根県における触法障害者の「入口支援」の展開過程及び課題の検討-A氏の事例を通じて
著者名	京 俊輔
発表誌名	司法福祉学研究, 15, 10-31, 2015

論文審査結果の要旨

本論文は、刑事司法手続き上にいる、触法行為をした障害者に対する福祉的支援の一つである「入口支援」に着目し、彼らの受入先になっている障害福祉サービス事業所における、障害のある被疑者・被告人の受入の構造とプロセスについて、定性的（質的）データを用いて、実証的に明らかにすることを目的としている。本論文では、この目的を達成するため、「入口支援」の展開過程に基づき、障害のある被疑者・被告人の起訴中の時期を「受入検討期」、判決直後から福祉サービス利用開始の時期を「受入準備期」、福祉サービス利用開始後を「受入開始期」に分け、研究の視点を「職員による支援内容」および受入に対する「職員の不安と不安軽減要因」として設定している。得られた成果は次のとおりである。

本論文では、第一に、「受入準備期」における職員の支援内容は、本人には《体験利用を通しての利用意思と適応能力の確認》、環境には《事例の確認とサービスの調整》として明らかにしている。「受入開始期」における職員の支援内容は、再犯をしないための《ルールの伝達と約束に基づく促しと確認》、生活の安定化のための《生活の基盤作りに基づく評価の実施および確認とストレングスの発見》として明らかにしている。第二に、受入に対する職員の不安は《自身の経験不足および能力に対する不安》、《障害のある被疑者・被告人の社会関係に対する不安》として、不安軽減要因は《情報収集や評価による相手の理解》《身元保証の確認および連携とバックアップ体制の確立》としてそれぞれ明らかにしている。そして第三に、「職員による支援内容」と「職員の不安と不安軽減要因」の関係についても、相互に影響し合っていることを、関係図を用いて具体的に明らかにしている。したがって、本論文での成果は、従来明らかにされてこなかった「入口支援」を通じた障害福祉サービス事業所における障害のある被疑者・被告人の受入に関する支援の内容、受入に対する職員の不安と不安軽減要因、および両者の関係について新しい知見を提供するものである。

以上の結果より、本論文の成果は、学術上、實際上ともに保健福祉学分野の発展に寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（保健福祉学）の学位論文として価値あるものと認める。